
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 元和《げんな》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 天性|奸智《かんち》に富んだ釈迦は

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) さん・じょあん・ばちすた [# 「さん・じょあん・ばちすた」に傍線]

元和《げんな》か、寛永《かんえい》か、とにかく遠い昔である。

天主《てんしゅ》のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙《ひあぶ》りや磔《はりつけ》に遇《あ》わされていた。しかし迫害が烈しいだけに、「万事にかなない給うおん主《あるじ》」も、その頃は一層この国の宗徒《しゅうと》に、あらたかな御加護《おんかご》を加えられたらしい。長崎《ながさき》あたりの村々には、時々日の暮の光と一しょに、天使や聖徒の見舞う事があった。現にあのさん・じょあん・ばちすた [# 「さん・じょあん・ばちすた」に傍線] さえ、一度などは浦上《うらかみ》の宗徒《しゅうと》みげる [# 「みげる」に傍線] 弥兵衛《やへえ》の水車小屋に、姿を現したと伝えられている。と同時に悪魔もまた宗徒の精進《しょうじん》を妨《さまた》げるため、あるいは見慣れぬ黒人《こくじん》となり、あるいは舶来《はくらい》の草花《くさばな》となり、あるいは網代《あじろ》の乗物となり、しばしば同じ村々に出没した。夜昼さえ分たぬ土の牢《ろう》に、みげる [# 「みげる」に傍線] 弥兵衛を苦しめた鼠《ねずみ》も、実は悪魔の変化《へんげ》だったそうである。弥兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙《ひあぶ》りになった。その元和か、寛永か、とにかく遠い昔である。

やはり浦上の山里村《やまざとむら》に、おぎんと云う童女が住んでいた。おぎんの父母《ちちはは》は大阪《おおさか》から、はるばる長崎へ流浪《るろう》して来た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を残したまま、二人とも故人になってしまった。勿論《もちろん》彼等他国ものは、天主のおん教を知るはずはない。彼等の信じたのは仏教である。禅《ぜん》か、法華《ほっけ》か、それともまた浄土《じょうど》か、何《なに》にもせよ釈迦《しゃか》の教である。ある仏蘭西《フランス》のジェスウイトによれば、天性|奸智《かんち》に富んだ釈迦は、支那《シナ》各地を遊歴しながら、阿弥陀《あみだ》と称する仏の道を説いた。その後《ご》また日本の国へも、やはり同じ道を教《おしえ》に來た。釈迦《しゃか》の説いた教によれば、我々人間の靈魂《アニマ》は、その罪の輕重《けいちよう》深淺に従い、あるいは小鳥となり、あるいは牛となり、あるいはまた樹木となるそうである。のみならず釈迦は生まれる時、彼の母を殺したと云う。釈迦の教の荒誕《こうたん》なのは勿論、釈迦の大惡《だいあく》もまた明白である。(ジアン・クラッセ) しかしおぎんの母親は、前にもちょいと書いた通り、そう云う真実を知るはずはない。彼等は息を引きとった後《のち》も、釈迦の教を信じている。寂しい墓原《はかはら》の松のかげに、未は「いんへるの」に墮《お》ちるのも知らず、はかない極樂を夢見ている。

しかしおぎんは幸いにも、両親の無知に染まっていない。これは山里村《やまざとむら》居《い》つきの農夫、憐《あわれ》みの深いじょあん [# 「じょあん」に傍線] 孫七《まごしち》は、とうにこの童女の額へ、ばぷちずも [# 「ばぷちずも」に傍線] のおん水を注いだ上、まりや [# 「まりや」に傍線] と云う名を与えていた。おぎんは釈迦が生まれた時、天と地とを指しながら、「天上天下《てんじょうてんげ》唯我独尊《ゆいがどくそん》」と獅子吼《ししく》した事などは信じていない。その代りに、「深く御柔軟《ごにゅうなん》、深く御哀憐《ごあいれん》、勝《すぐ》れて甘《うまし》くまします童女さんた・まりあ [# 「さんた・まりあ」に傍線] 様」が、自然と身ごもった事を信じている。「十字架《くるす》に懸《かか》り死し給い、石の御棺《ぎょかん》に納められ給い、」大地の底に埋められたぜすす [# 「ぜすす」に傍線] が、三日の後《のち》よみ返った事を信じている。御糺明《ごきゅうめい》の喇叭《らっぱ》さえ響き渡れば、「おん主《あるじ》、大いなる御威光《ごいこう》、大いなる御威勢《ごいせい》を以て天下《あまくだ》り給い、土埃《つちほこり》になりたる人々の色身《しきしん》を、もとの靈魂《アニマ》に併《あわ》せてよみ返し給い、善人は天上の快樂《けらく》を受け、また悪人は天狗《てんぐ》と共に、地獄に墮《お》ちる事を信じている。殊に「御言葉《みことば》の御聖徳《ごしょうとく》により、ぱんと酒の色形《いろかたち》は変わらずといえども、その正体《しょうたい》はおん主《あるじ》の御血肉《おんけつにく》となり変る」尊いさがらめんと [# 「さがらめんと」に

傍線」を信じている。おぎんの心は両親のように、熱風に吹かれた沙漠《さばく》ではない。素朴《そぼく》な野薔薇《のばら》の花を交《まじ》えた、実りの豊かな麦畠である。おぎんは両親を失った後、じょあん〔#「じょあん」に傍線〕孫七の養女になった。孫七の妻、じょあんな〔#「じょあんな」に傍線〕おすみも、やはり心の優しい人である。おぎんはこの夫婦と一しょに、牛を追ったり麦を刈ったり、幸福にその日を送っていた。勿論そう云う暮らしの中にも、村人の目に立たない限りは、断食や祈祷《きとう》も怠った事はない。おぎんは井戸端《いどばた》の無花果《いちじく》のかげに、大きい三日月《みかづき》を仰ぎながら、しばしば熱心に祈祷を凝《こ》らした。この垂れ髪の童女の祈祷は、こう云う簡単なものなのである。

「憐みのおん母、おん身におん礼をなし奉る。流入《るにん》となれるえわ〔#「えわ」に傍線〕の子供、おん身に叫びをなし奉る。あわれこの涙の谷に、柔軟《にゅうなん》のおん眼をめぐらせ給え。あんめい〔#「あんめい」に傍線〕。」

するとある年のなたら〔#「なたら」に傍線〕（降誕祭《クリスマス》）の夜《よ》、悪魔《あくま》は何人かの役人と一しょに、突然―孫七《まごしち》の家《いえ》へはいつて来た。孫七の家には大きな囲炉裡《いろり》に「お伽《とぎ》の焚《た》き物《もの》」の火が燃えさかっている。それから煤《すす》びた壁の上にも、今夜だけは十字架《くるす》が祭ってある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、ぜすす〔#「ぜすす」に傍線〕様の産湯《うぶゆ》のために、飼桶《かいおけ》に水が湛《たた》えられている。役人は互に頷《うなず》き合いながら、孫七夫婦に縄《なわ》をかけた。おぎんも同時に括《くく》り上げられた。しかし彼等は三人とも、全然悪びれる気色《けしき》はなかった。靈魂《アニマ》の助かりのためならば、いかなる責苦《せめく》も覚悟である。おん主《あるじ》は必ず我等のために、御加護《おんかご》を賜わるのに違いない。第一なたら〔#「なたら」に傍線〕の夜《よ》に捕《とら》われたと云うのは、天寵《てんちょう》の厚い証拠ではないか？ 彼等は皆云い合せたように、こう確信していたのである。役人は彼等を縛《いまし》めた後《のち》、代官の屋敷へ引き立てて行った。が、彼等はその途中も、暗夜《やみよ》の風に吹かれながら、御降誕《ごこうたん》の祈祷を誦《じゅ》しつづけた。

「べれん〔#「べれん」に傍線〕の国にお生まれなされたおん若君様、今はいずこにましますか？ おん讃《ほ》め尊《あが》め給え。」

悪魔は彼等の捕われたのを見ると、手を拍《う》って喜び笑った。しかし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になった後《のち》、忌々《いまいま》しそうに唾《つば》をするが早いか、たちまち大きい石臼《いしうす》になった。そうしてごろごろ転がりながら闇の中に消え失《う》せてしまった。

じょあん〔#「じょあん」に傍線〕孫七《まごしち》、じょあんな〔#「じょあんな」に傍線〕おすみ、まりや〔#「まりや」に傍線〕おぎんの三人は、土の牢《ろう》に投げこまれた上、天主《てんしゅ》のおん教を捨てるように、いろいろの責苦《せめく》に遇《あ》わされた。しかし水責《みずぜめ》や火責《ひぜめ》に遇っても、彼等の決心は動かなかった。たとい皮肉は爛《ただ》れるにしても、はらいそ〔#「はらいそ」に傍線〕（天国《てんごく》）の門へはいるのは、もう一息の辛抱《しんぼう》である。いや、天主の大恩を思えば、この暗い土の牢さえ、そのまま「はらいそ」の莊嚴と変りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつつともつかない中に、しばしば彼等を慰めに来た。殊にそういう幸福は、一番おぎんに恵まれたらしい。おぎんはさん・じょあん・ばちすた〔#「さん・じょあん・ばちすた」に傍線〕が、大きい両手のひらに、蝗《いなご》を沢山―掬《すく》い上げながら、食えと云う所を見た事がある。また大天使がぶりえる〔#「がぶりえる」に傍線〕が、白い翼を畳んだまま、美しい金色《こんじき》の杯《さかずき》に、水をくれる所を見た事もある。

代官《だいかん》は天主のおん教は勿論、釈迦《しゃか》の教も知らなかったから、なぜ彼等が剛情《ごうじょう》を張るのかさっぱり理解が出来なかった。時には三人が三人とも、間違いではないかと思う事もあった。しかし間違いでもない事がわかると、今度は大蛇《だいじゃ》とか一角獣《いっかくじゅう》とか、とにかく人倫《じんりん》には縁のない動物のような気がし出した。そう云う動物を生かして置いては、今日《こんにち》の法律に違《たが》うばかりか、一国の安危《あんき》にも関《かかわ》る訣《わけ》である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後《のち》、とうとう三人とも焼き殺す事にした。（実を云えばこの代官も、世間一般の人々のように、一国の安危に関《かかわ》るかどうか、そんな事はほとんど考えなかった。これは第一に法律があり、第二に人民の道徳があり、わざわざ考えて見ないでも、格別不自由はしなかったからである。）

じょあん〔#「じょあん」に傍線〕孫七《まごしち》を始め三人の宗徒《しゅうと》は、村はずれの刑場《けいじょう》へ引かれる途中も、恐れる気色《けしき》は見えなかった。刑場はちょうど墓原《はかはら》に隣った、石ころの多い空き地である。彼等はそこへ到着すると、一々罪状を読み聞かされた後《のち》、太い角柱《かくばしら》に括《くく》りつけられた。それから右にじょあんな〔#「じょあんな」に傍線〕おすみ、中央にじょあん〔#「じょあん」に傍線〕孫七、左にまりや〔#「まりや」に傍線〕おぎんと云う順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦《せめく》のため、急に年をとったように見える。孫七も髭《ひげ》の伸びた頬《ほお》には、ほとんど血の気《け》が通《かよ》っていない。おぎんも　おぎんは二人に比《くら》べると、まだしもふだんと変らなかった。が、彼等は三人とも、堆《うずたか》い薪《たきぎ》を踏《ふ》まえたまま、同じように静かな顔をしている。

刑場のまわりにはずっと前から、大勢《おおぜい》の見物を取り巻いている。そのまた見物の向うの空には、墓原の松が五六本、天蓋《てんがい》のように枝を張っている。

一切《いっさい》の準備の終わった時、役人の一人は物々《ものもの》しげに、三人の前へ進みよると、天主のおん教を捨てるか捨てぬか、しばらく猶予《ゆうよ》を与えるから、もう一度よく考えて見ろ、もしおん教を捨てると云えば、直《すぐ》にも縄目《なわめ》は赦《ゆる》してやると云った。しかし彼等は答えない。皆遠い空を見守ったまま、口もとには微笑《びしょう》さえ湛《たた》えている。

役人は勿論見物すら、この数分の間《あいだ》くらいひっそりとなったためしはない。無数の眼はじっと瞬《またた》きもせず、三人の顔に注がれている。が、これは傷《いたま》しさの余り、誰も息を呑んだのではない。見物はたいいてい火のかかるのを、今か今かと待っていたのである。役人はまた処刑《しょけい》の手間どるのに、すっかり退屈し切っていたから、話をする勇氣も出なかったのである。

すると突然一同の耳は、はっきりと意外な言葉を捉《とら》えた。

「わたしはおん教を捨てる事に致しました。」

声の主はおぎんである。見物は一度に騒《さわ》ぎ立った。が、一度どよめいた後《のち》、たちまちまた静かになってしまった。それは孫七が悲しそうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない声を出したからである。

「おぎん！ お前は悪魔《あくま》にたぶらかされたのか？ もう一辛抱《ひとしんぼう》しさえすれば、おん主《あるじ》の御顔も拝めるのだぞ。」

その言葉が終らない内に、おすみも遥《はる》かにおぎんの方へ、一生懸命な声をかけた。

「おぎん！ おぎん！ お前には悪魔がついたのだよ。祈っておくれ。祈っておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。ただ眼は大勢《おおぜい》の見物の向うの、天蓋《てんがい》のように枝を張った、墓原《はかはら》の松を眺めている。その内にもう役人の一人は、おぎんの縄目を赦《ゆる》すように命じた。

じょあん〔#「じょあん」に傍線〕孫七はそれを見るなり、あきらめたように眼をつぶった。

「万事にかない給うおん主《あるじ》、おん計《はか》らいに任せ奉る。」

やっと縄を離れたおぎんは、茫然《ぼうぜん》としばらく佇《たたず》んでいた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪《ひざまず》きながら、何も云わずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉じている。おすみも顔をそむけたまま、おぎんの方は見ようとしめない。

「お父様《とうさま》、お母様《かあさま》、どうか勘忍《かんにん》して下さいまし。」

おぎんはやっと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訣《わけ》はふと向うに見える、天蓋のような松の梢《こずえ》に、気のついたせいでございます。あの墓原の松のかげに、眠っていらっしゃる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きっと今頃はいんへるの〔#「いんへるの」に傍線〕に、お墮《お》ちになっていらっしゃいましょう。それを今わたし一人、はらいそ〔#「はらいそ」に傍線〕の門にはいったのでは、どうしても申し訣《わけ》がありません。わたしはやはり地獄《じごく》の底へ、御両親の跡《あと》を追って参りましょう。どうかお父様やお母様は、ぜすす〔#「ぜすす」に傍線〕様やまりや〔#「まりや」に傍線〕様の御側《おそば》へお出でなすって下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。………」

おぎんは切れ切れにそう云ってから、後《あと》は噉《すす》り泣きに沈んでしまった。すると今度はじょあんな〔#「じょあんな」に傍線〕おすみも、足に踏んだ薪《たきぎ》の上へ、ほろほろ涙を落し出した。これからはらいそ〔#「はらいそ」に傍線〕へはいろいろとするのに、用もない歎《なげ》きに耽《ふけ》っているのは、勿論|宗徒《しゅうと》のすべき事ではない。じょあん〔#「じょあん」に傍線〕孫七は、苦々《にがにが》しように隣の妻を振り返りながら、癪高《かんだか》い声に叱りつけた。

「お前も悪魔に見入られたのか？ 天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好《い》い。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供《とも》を致します。けれどもそれは　それは」

おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶように言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそ〔#「はらいそ」に傍線〕へ参りたいからではございません。ただあなたの、あなたのお供を致すのでございます。」

孫七は長い間《あいだ》黙っていた。しかしその顔は蒼《あお》ざめたり、また血の色を漲《みなぎ》らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂《アニマ》を見ているのである。彼の靈魂《アニマ》を奪い合う天使と悪魔とを見ているのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を挙げずにいたら、　いや、もうおぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢《あふ》れた眼には、不思議な光を宿しながら、じっと彼を見守っている。この眼の奥に閃《ひらめ》いているのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流入《るにん》となれるえわ〔#「えわ」に傍線〕の子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様！ いんへるの〔#「いんへるの」に傍線〕へ参りましょう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、　みんな悪魔にさらわれましょう。」

孫七はとうとう墮落した。

この話は我国に多かった奉教人《ほうきょうにん》の受難の中《うち》でも、最も恥《は》ずべき蹟《つまず》きとして、後代に伝えられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなった時には、天主の何たるかをわきまえない見物の老若男女《ろうにゃくなんにょ》さえも、ことごとく彼等を憎んだと云う。これは折角《せっかく》の火灸《ひあぶ》りも何も、見そこなった遺恨《いこん》だったかも知れない。さらにまた伝うる所によれば、悪魔はその時大歓喜のあまり、大きい書物に化《ば》けながら、夜中《よじゅう》刑場に飛んでいたと云う。これもそう無性《むしょう》に喜ぶほど、悪魔の成功だったかどうか、作者は甚だ懐疑的である。

[# 地から 1 字上げ] (大正十一年八月)

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987 (昭和62) 年2月24日第1刷発行

1995 (平成7) 年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。